

令和元年度 焼津中央幼稚園 自己評価・学校関係者評価

令和2年2月22日

学校法人齋藤学園 焼津中央幼稚園長 今村千枝

学校法人齋藤学園 焼津中央幼稚園学校関係者評価委員

1 幼稚園の教育目標

「明るく、たくましく、頑張る子」

2 重点目標

- (1) 健康（心身の健康に関する教育）
 - ・心身共に健やかで、よく遊ぶ事。
- (2) 人間関係（人とのかかわりに関する教育）
 - ・自分で出来る事は自分で行い、他人を思いやり、他人と協力出来る態度習慣を養う。
- (3) 環境（自然や身近な環境に関する教育）
 - ・身近な動植物を愛し、自然や社会の事に対する興味や関心を持たせる。
- (4) 言葉（言葉の獲得に関する教育）
 - ・日常生活に必要な言葉への興味や関心を育て、よろこんで話したり聞いたりする態度や言葉への感覚を養う。
- (5) 表現（感性と表現に関する教育）
 - ・生活を通して豊かな情操を養い、思考力の基礎と道徳性の芽生えを養う。
 - ・いろいろな表現活動の体験の場を通して、豊かな感性を育て創造性を養う。

3 評価項目の達成及び取組状況

別添「評価項目の達成及び取組状況一覧表」のとおり。

4 自己評価コメント

(1) 子どもの姿

- ・年少児

入園間もないころは、自分の居場所を探している子、保護者と離れ、さみしさから泣いている子、どうしていいの分からない子、園庭をふらふら歩いている子、様々な姿があり、そのような子ども達にどのような言葉をかけたらいいかと、毎年考えてしまう。子どもの気持ちを汲み、想いを共有する事をしてきたが、子どもが安心できる言葉、環境を考えてみたい。

近年、小規模保育園や託児所を経験して入園してくる子、本園で満三歳児として入園し一歳年上の子と経験を積んできている子がいる。小さな集団生活には慣れているが、幼稚園の大きな集団生活に戸惑っている様子があり、先生の気を引こうと

する姿がみられる。経験の有無は問わず、一人ひとりの想いを受け止めていく必要があると感じる。また、外国籍の子どももおり、日本語でのコミュニケーションがとりにくいと感じる。自宅でも、日本語での会話を楽しむようお願いしている。

給食の時間が苦痛に思っている子がいる。その一つに、箸が上手く使えず食べるのが嫌になってしまうことがあるようだ。自宅では、食べさせてもらっている子が多く、給食を目の前にして座っている姿を見ることがある。スプーン、フォーク、しつけ箸を使用している子には、少しの間でも箸を持たせ食べさせるようにしている。また、見た目で嫌がる子も多い。近年“食育”の大切さを言われているが、本園でも食事や食物に関する知識と選択力をつけ、給食が楽しい時間になるように工夫していきたい。外遊びが苦手な子もいる。汚れを気にせず遊べる子、遊びこめる子が少なくなってきた。服の汚れ、手が汚れるのが気になる子、また手先のぎこちない子も増えてきているように思う。入園前に園庭開放で、砂場遊びをしている姿を見るが、保護者が服の汚れ、手の汚れを気にすることで思うように遊べなくなっているように思う。室内の活動では、シール貼り、新聞破り、くれよん、マジックなどを使用して活動を計画しているが、時間が十分でないため自宅でも協力していただく必要がある。園庭開放の活動内容の見直しが必要だと感じる。幼稚園入園するまでの間に、出来ることを一つでも増やし自信をもつことが大切だと感じる。

二学期になると、クラスもまとまり子ども達の活動も活発になってくる。運動会の種目のリレー、玉入れ、お遊戯に積極的に関わる姿が見られた。リレーでは友達を応援し、勝ち負けで喜びや悔しさを表情にあらわすようになる。廃材で製作する事も数を重ねるたびに、自分なりに自由な発想で物を作る楽しみを覚えたように感じる。友達との関わりや担任以外の先生との関わりも増え、園生活が充実してきたように思う。その反面、友達との距離がわからずトラブルになることも増えた。言葉の少なさから自分の想いが伝わらず、解決できないことも多いので、保育者が間に入りそれぞれの気持ちや考えをくみ取り子どもに伝えているが、子どもの想いが十分伝わっているか考えることがある。

難しいと思うが、同年齢異年齢の子と関わる事で、経験や体験を通して子ども同士で理解できるようになればと思う。

三学期は、お遊戯会を学年のまとめの行事として目標をたて練習をした。お遊戯を決める時、思い通りにならない子の気持ちをくむ姿や、相手を思いやり譲る姿を見ることが出来た。一人ひとりが十分力を発揮し、子ども達の顔も自信に満ちあふれていた。年中に進級してからも、子どもの力を見守っていきたい。

・年中児

年少時の子どもの様子を聞き引き継いでいるが、部屋が変わり、担任、友達も変

わり戸惑う姿をみせる。近年、保育室が変わることで、部屋に入る事ができない子どもが増えてきているように思う。合同保育、縦割り保育又は、担任が変わることで、足が一步も進まない子や、泣き出してしまう子がいる。その時その時の環境の変化に上手くついていけなく、心に折り合いをつけるのに、大変な思いをしている。子どもの気持ちを考え担任が寄り添い、想いをくんで話すことで落ち着く事はある。また、何度か環境が変わるうちに、慣れていくこともあるが、学年末まで不安な気持ちを持っている子もいる。子ども自身、一つ上になったことでのプレッシャーがあり、一斉保育、合同保育、縦割り保育の難しさを感じることもある。

年中になると、初めての事に挑戦しなくてはならない事が数多くある。

その一つとして、メロディオン指導がある。メロディオンを初めて触る子、鍵盤に触れる子が多く、子どもが楽しく触れる姿を見るが、曲の練習になると、思うように指が動かす事が難しく、苦戦している子が多い。始めから、苦手意識を持つ子も多くおり、メロディオンの練習時間が苦痛に思っている子どもも少なくない。どの子にも楽しく練習できるように保育士が指導の進め方、声かけ等、工夫する必要があると感じた。自身が持てるように夏休みに、メロディオンの練習をするように、保護者に声をかけ協力して頂く必要がある。

運動会でも、年少の時とは違い“みんなで協力して、一つのものをつくり上げる”ことへの挑戦として学年全体で力を合わせての“バルーン”を、長期間練習をして披露した。心を一つにしてつくりあげ、仲間と同じ時間を共有することの大切さや達成感は今までに味わった事がなかったと思う。良い経験になった。この経験があり造形展では、“トイストーリーの世界”をつくり上げた。クラスが一つになり団結力も深まり、多くの意見も出て各クラス良い作品ができたように思う。

また、お遊戯会では“オペレッタ”に挑戦した。役決めの時やりたい役が重なったとき、じゃんけんで決め、自分の気持ちだけでなく相手の気持ちを考え、“譲”ということも自然にできるようになった。相手の気持ちを感じる、考えられるように育ってきたように思う。練習を重ねていくうちに、保育士が思いもよらないアイデアを出し、子どもの目線での感じ方、成長を見ることができた。発表当日は、ドキドキが止まらず言葉が出ない子、顔が引きつってしまっている子、いつものように力が発揮できない子がいる。その反面、嬉しくていつも以上の力が発揮できる子もいる。人前に出てやる“恥ずかしさ”、大勢の人の前に出る“緊張”というものも感じてきている。運動会、造形展、お遊戯会等、大きな行事があると、頑張りすぎるのか自分の思いを上手く表現できない子が、多くなるように思う。子どもの気持ちや、考え、想っていることを、保育士が上手く代弁し、引き出し子どもの想いをくみ取れることを大事にし、子どもの発した言葉を大切にすることがある。

先生との関係、友達との関係、幼稚園の環境がある程度分かっているから、良いことも悪いことも、周りの様子を見ながら行動する力がついてきた。年少児の

頃から引き続き行っている、廃材遊びも活発になり、時間を見つけては思い思いの物をつくっている。また、自宅に持ちかえる事で保護者との会話がはずむようだ。年がかわると、“もうすぐ、年長さんになる”という意欲が出てきて、行動や発言に自身もてるようになったと感じる。子どもが持っている、意欲、自信、熱意を失う事なく、年長の一年間を過ごして欲しい。

・年長児

子ども一人ひとりから、“幼稚園で一番大きいクラスになった。”お兄さん、お姉さんになった。”という嬉しさがうかがえる。自分から進んで手伝い、年少児の世話をし、お楽しみ給食の配膳を各学年にまわる力もでてきた。年中児から練習を始めた鼓笛を、引き続き運動会に向けて練習がはじまる。中には練習が苦痛な子どもおり、どのように指導していったら良いのかを、保育士で考えながら、指導をすすめた。総主任に、指導に関わってもらい、経験者の先生方の指導を参考にしながらすすめた。

年々、暑さが邪魔をして十分な練習時間が確保できず、難しさを感じる。

練習時間の確保、指導の仕方等、再度教職員で考え、共通理解をすることが必要である。保護者、卒園児父兄から、鼓笛のあり方を問われ、本園にとり鼓笛は重要であるということ、毎年期待してくれるということを再度認識した。来年度以降は、保護者の皆様、卒園児父兄の期待に応えるように、教職員で連携を図り、子どもたちがもっている力を十分発揮できるように指導し、披露させたい。

行事を重ねていくたびに、子ども達同士の関わりが深くなっているように感じる。

運動会でのリレーでは、負けて悔しいのに、最後まで走りきった友達を拍手で迎え、褒めている姿がみられた。勝ち負けをつけるのも大切だが、それ以上に友達を気遣う気持ちの姿を見て心が温かくなった。このような子ども達に育ってくれて、誇らしい。

幼稚園最後の行事、お遊戯会。三年間、四年間の園生活で蓄えた力をどの子ども出しきれたと思う。役決めでは、納得いかないなく、自分の気持ちを伝えることができなくて、涙する姿もあったが、子どもたちで話をして解決する事ができた。練習している時間の子ども達同士の関わり、育ちも大切にしていきたい。たくさんの台詞も覚えて臨んだ劇。劇の内容も一人ひとり把握し、長い台詞も大勢のお客さんの前で堂々と発表出来きた。遊戯は、男の子は力強く、女子はしなやかに踊り、沢山の拍手をいただいた。どの子ども自信に満ちあふれていて、達成感を味わうことができたと感じる。小学校生活への期待、それとは反対に不安を持っている子がいる。小学校の体験会があるが、一回の体験会で終わらず、何度か交流をして小学校の先生方に子どもの姿、表れ、様子を見ていただける機会をつくっていただきたい。少しでも、幼稚園のことを知っていただくために、小学校に毎月園だよりをおくって

いる。小学校の先生方と連携を図る事ができればと思う。

また、新しい環境に少しでも早くなれるように、子どもや保護者の不安な気持ちに寄り添ってほしい。わからないところ、先生や友達に聞けない子がいる。こんなことを聞いたら笑われる、恥ずかしいと、思っている子に、“わからないこと”は、恥ずかしいことではないということ、伝えていきたい。どんなことがあっても、前に進める子どもに育ててほしい。

5 学校関係者評価コメント

年々、行事が簡素化されているように思う。

季節の行事は、季節を行事で感じられるように、行った方が良いと思う。

園外保育も、近場の公園に行くことが多く、少し距離を延ばして出かけても良いと感じる。事故などのことを考えると、難しいのだろうか？また、園庭で転んで怪我をする姿をよく目にする。園庭には、目立った段差はない。転んだとき手をつかない子が多く、顔に怪我をしている子もいる。足を強くするために時間がある限り、外で遊ばせたほうが良いと感じる。

来年度は、季節の中を感じる行事を計画していただきたい。

園の見解

数々の行事を行ってきたが、日本の季節の行事、地域の行事を大切にしたい。

教職員で保育の見直し、行事の見直しをしていく必要があると感じ、幼稚園から小学校、中学校、高等学校までを見通して、社会の変化や子ども達の育ちについて、どのようなことを育むかを、幼児の発達や学びの個人差を考えながら、「幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿」獲得できるように日々の保育を行っていきたい。